



第 21 号

編集発行／碧南市

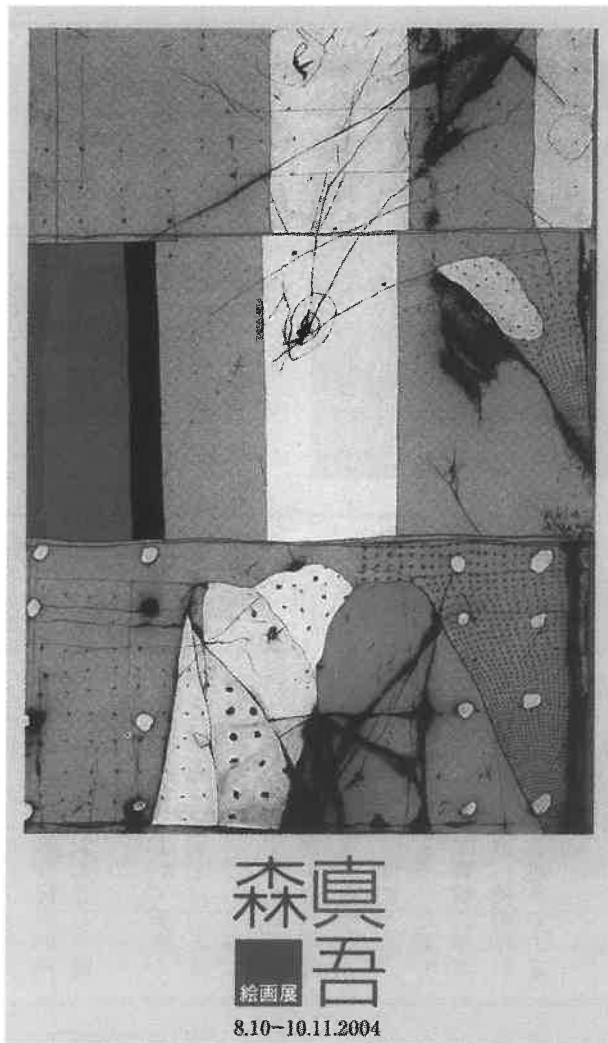
哲学たいけん村

無我苑

所在地／碧南市坂口町 3-100

〒447-0087 : TEL. 0566-41-8522

: FAX. 0566-41-7761



開催期間

8月10日(火)~

10月11日(月・祝)

(月曜日休苑、月曜日

が祝日の場合は翌日)

午前9時~午後9時

開催場所

哲学たいけん村無我苑

瞑想回廊

料金 無料

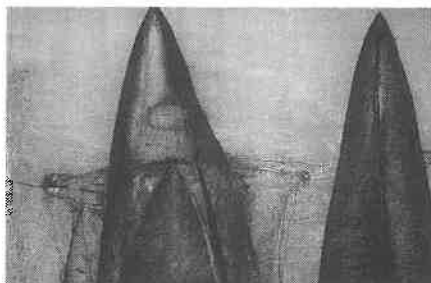
瞑想回廊第二十二回企画展示

『無題の記録』 森真吾絵画展

森真吾

1937 愛知県半田市に生まれる
 1960 愛知教育大学美術科卒業
 1980 名古屋市芸術奨励賞受賞
 現在、名古屋芸術大学教授

※詳細な画歴等はNOTA22号
 をご覧ください



伊藤証信の遺品

書籍「河上肇博士と宗教」

(伊藤証信著)

この本は昭和二十三年十月に出版された。出版される二年前に河上肇は六十七年の生涯を終えており、河上が亡くなったことをきっかけに、証信自身が河上の宗教感や自身との関係をまとめた一冊の著書である。

☆

『河上博士と私との関係を一度はつきりさせて置きたいとは、私のかねて考へて居たところであつたが、これまでその機会がなかつた。それといふのも個人的には終始一貫親交はあつたが、しかしマルクス主義者としての博士が一宗教家としての私に対して如何なる感懐を抱いてゐられるかといふことが判らなかつたのである。

然るに博士はその逝去に先立ち「思ひ出」及び「自叙伝」の二書を著はされ、それらの中には私並に私の信ずる「無我愛」の真理に関する記述が合せて百余頁にも及んでをり、それによつて博士の考へへの大略を知ることができたのである。(中略)
かくして私はこれらの点を明かにする

ことは、ひとり博士と私とのためのみでなく、その拘はるところが宗教とマルキシズムを中心とする点からして、今日わが国の思想的昏迷に対して必ずや貢献するものがあらうと信じ、ここにこの小著を公にすることにした次第である。』

(巻頭「自著」より)



河上肇は、証信が東京で活動していた頃発行していた『無我の愛』の中で、証信が真宗大谷派の僧籍を返上するに至つた経緯と心情を掲載した明治三十八年十月二十五日付『脱宗号』に強い衝撃を受け、それまで教鞭をとつていた五つの学校に辞職願ひを出し無我苑に入苑。当時読売新聞に「社会主義評論」を連載していた河上の入苑は無我苑を一躍有名にしたが、急速に発展した無我苑は2ヶ月後証信を始めとする同朋の修行未熟を理由

に突如閉鎖。その後、河上は証信との哲学的な考え方の違いにより無我苑との関わりを断つたが、個人的に友人として親交を深めていた。

河上はマルクス主義派において異色の、宗教を根底にした理論を展開したことは、河上自身も「自叙伝」において「一般にマルクス主義は宗教を否定するものとされている。しかるに私は、マルクス主義を奉じながら、宗教的心理なるもの存在を信じていたのであって、その点に、私という人間の特殊性がある。」と記しているが、本書序文において森信三が河上の思想の根底に宗教があり、その中には証信の影響も少なくないと述べている。

参考図書「河上肇 自叙伝(五)」

杉原四郎・一海知義編
「伊藤証信とその周辺」
柏木隆法

河上肇(一八七九〜一九四六)

明治・大正・昭和期の経済学者・社会思想家。山口県生まれ。京大教授。人道主義を経て、マルクス主義経済学の研究と無産運動に従事。一九二八年京大を追われ、新労農党を結成、のち共産党に入党。一九三三年九月から一九三七年六月まで投獄された。著書「貧乏物語」「資本論入門」「自叙伝」など。

癒しの音

「一絃琴演奏会を終えて」

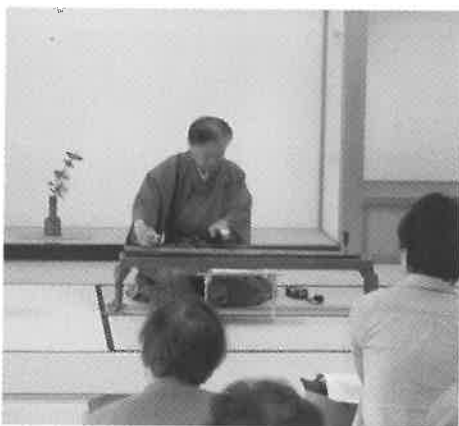
▽日時 平成十六年四月二十九日(木) 二時〜四時

▽場所 無我苑 研修道場

▽演奏者 永川辰男

(一絃琴楽風会主宰)

たった一本の弦で奏でられ、哀愁を帯びながらも凜とした音色をもつ一絃琴。そんな一絃琴が盛んに演奏されたのも江戸から明治時代まで。明治時代末期以降は衰退の一途をたどり幻の楽器と言われるまでになりました。今では少なくなつた演奏者の一人である永川辰男氏に演奏と一絃琴にまつわるお話をいただきました。当日は二十五名の参加者が、心地よい春の午後のひととき、一絃琴の心に沁み入るような音色に聞き入りました。



はじめての瞑想を終えて

▽日時 平成十六年五月十五日(土) 十時～十一時

▽場所 無我苑 研修道場

▽講師 木村則昭氏 (NHK・中日文化センター気功健康法講師)

瞑想回廊にはメデイテーションルーム(瞑想室)がありながら、これまで瞑想法を勉強する機会を提供できていませんでした。そこで、無我苑において初めての瞑想講習会「はじめての瞑想」を開催しました。今回の講習会は初心者の方を対象に比較的馴染みのある気功を取り入れた瞑想法を体験し、心身のリラクセスを感じていただくことを目的としました。当日は男女を問わず様々な年齢層の方に体験していただきました。



〈受講者の感想〉

◎気功等は初めての体験でした。日々忙しく、雑念ばかりの生活です。でも、五十歳をすぎ、心に少し余裕というか、ゆったりとした気持ち、肩に力が入らない生活を送るの也不错なと思っていたところ、このような体験ができたのです。

◎実際に体を動かして汗が出そうな感じがしました。また横になった時は吸い込まれるような気がして、気持ちのいい感じがしました。講座が終わったときは何かすっきりした感じがして体が軽くなったような気がします。

◎気功と瞑想は別のものと思っていました。無念の状態に自分なりに参加しました。普段どうしてもリラックスできず、いつも緊張しているのでも疲れまじり、ストレスも発散できません。今回、眠たくなるほど、リラックスできました。瞑想をいつでもできるようになりたい。健康のために瞑想で自分のからだを静かに休ませてあげたいと思います。

※来年度以降も瞑想に関する講座を開催する予定です。興味のある方のご参加お待ちしております。

お知らせ

三曲定期演奏

本年度より海々庵茶会開催日に三曲の定期演奏を安吾館の和室で行っております。

演奏は碧南文化協会箏曲部・尺八部の各団体をお願いしており、4月から4回ほど開催しましたが、風情のある箏曲の音は茶会参加者の心に沁みわたり茶会の雰囲気を一層盛り上げています。



平成16年度

三曲定期演奏・出演社中

	箏 曲	尺 八
平成16年		
8月22日	若草会	竹秀会
9月26日	永坂会	竹秀会
10月24日	絲音の会	竹秀会
11月28日	若草会	竹秀会
12月19日	祥友会	祥友会・竹秀会
平成17年		
1月23日	永坂会	竹秀会
2月27日	絲音の会	竹秀会
3月27日	若草会	竹秀会

※出演社中の都合により交代する場合があります。

瞑想回廊改装工事

無我苑では開苑以来はじめてとなる大規模な改装工事を6月より瞑想回廊において行っておりまして。このたび工事が終了し、新しく展示室（旧ハイビジョンギャラリー室）が設けられました。

今回の企画展示からこの展示室を含めた展示を行いますのでどうぞお楽しみに。また、旧ハイビジョンギャラリーで放映しておりました映像ソフトはDVDに再編集されまして、芸術文化村内の市民図書館においてご覧頂けますので、ぜひご利用ください。



展示室の概要

広さ 約八十五㎡
天井高 三 m

DVDソフト

「あなたの哲学たいけん（無我苑の施設紹介ビデオ）」

「いのちあるもの、油ヶ淵24時、時間と空間の不思議」

「心象無辺 清碧・矢作川、無存律、流れの随に」

「哲学的なたいけん（この人とコーヒーブレイク）」

「へきなん、日本の名園、ベルサイユ宮殿」ほか

本の情報

●三省堂

異界の記憶

日本的たましいの現像を求めて

久野 昭著

「この本には別冊『今昔物語』の趣がある。足繁く異界にかよう道すがら聞く森羅万象の声、見交わすまればとの姿が茜色の記憶によみがえる。はるかなるアクロポリスの丘に吹く風またよみがえり、詩と哲学が頷き会う。」

（杉本秀太郎 本書の帯の文句より）

来苑者の声（アンケートより）

◎展示ギャラリーを見ていて不思議な感覚になりました。リラクゼーションルームでも同様に…。

（四九歳 男性 建設業）

◎かなりいい所を見つけたとうれしく思いました。いろんなことでの考え方が丸く持つことができたらしいなと思えました。瞑想回廊の建物は曲線を多様に使っているのが、少し怖く感じるような、引きこまれるような変わった体験ができました。

（二四歳 女性 会社員）

◎初めて来苑しました。また心が疲れたら、ゆっくり癒していたらこうと思えます。ありがとうございます。

（五十歳 女性 主婦）

編集後記

哲学の小径

このかわら版でも幾度と話題に登っている「哲学の小径」であるが、本年度いよいよ着工される。哲学の小径は、県下最大規模の自然湖沼「油ヶ淵」の湖畔にある市民憩いの場「花しょうぶ園」、蓮如上人ゆかりの寺「応仁寺」を訪れた人々が、無我苑から応仁寺へ、あるいは応仁寺から無我苑へ、歩きながら哲学、文学、歴史、自然を体験することができる。歩きたくなる散策道として『哲学の小径』（総延長約580m）を整備するものである。▽発想の原点は西端を考える会と

（社）碧南青年会議所によって出された「蓮如上人ゆかりの郷をめぐる小径」と題された提言。その中で「小径」の目指すものとは、「行き交う人々が笑顔でありさつを交わせるような温かい空間づくりとして、その町特有の素材（文化財・歴史的建物・街並み）を活かし、人が主権の『小径』を蘇らす。」とある。▽幾多の検討を重ね「蓮如上人ゆかりの郷をめぐる小径」とは別に「哲学の小径」として、応仁寺と無我苑の間、現行のルートで整備をされることとなったが、小径に関する考え方は一緒である。どこかへ到達するためだけでない、その道行に何かがある、人や自然、文化との出会いがあるような、そんな小径となるように願いたい。▽理想をいっぱい詰め込んだ小径ができあがる日はそう遠くない。それまでに「歩きたくなる散策道」を充分体感できるようウォーキングの訓練でもしてみましようか。

（無我苑 杉浦）

